

## 通院支援を通じて患者の心と身体を支える

### —当院における8年の取り組み—

長崎腎病院

○藤原久子 林田めぐみ 丸山祐子 宮崎健一 李嘉明 原田孝司 船越 哲

#### 【はじめに】

外来維持透析のための通院問題は、高齢者・長期透析患者・重度の合併症を有する患者にとって、増々深刻化している。通院手段の確保は、透析患者の心と身体を支える大切な要因の一つであり、今回のテーマである「喪失をどう受け止めていくか」のプロセスについても直結していくと考えられる。通院支援に対し当院が取り組んできた最近の8年を報告すると共に、患者が喪失をどのように受け止めているかにも触れていきたい。

#### 【通院支援取組へのきっかけ】

- (1) 高齢化・長期透析患者・合併症を有する患者の増大。
- (2) 主に医師・スタッフ不足により地域の透析室が閉鎖となり当院が受け入れ施設となった。
- (3) 地方都市特有のへき地の過疎化、等により通院に対する患者の不安な声が増大してきた。

#### 【当院での取り組み】

具体的な通院支援方法としては、以下とした。

- (1) 当院の病院車による送迎；民間ボランティアも検討したが、継続性・安定性の面から自施設での運営とした。
- (2) 社会資源の開拓・有効活用；早期からの介護保険申請を推進した。現実には透析導入までに介護保険が完備している患者は少なく、今後の問題と思われる。このようにして院内外の多くのスタッフが通院支援に取り組む事により、患者のADL低下や介護問題・金銭問題があっても多くの患者が何らかの通院手段で来院できるようになった。患者が通院中に支援スタッフに対し、感謝の言葉と弱音を吐かれるが、その際スタッフは患者の言葉に対し傾聴し、教育的な効果も得られているとの事である。
- (3) 特別養護老人ホームの設立；最終的に通院不能と判断された後は入院・入所しか選択肢がなく、入院ベッドに加えて老健施設を設立した。これにあたっては、利用者の経済的負担を軽減するために特別養護老人ホームとし、地方自治体の理解を得て、9階建て病院の7・8階部分を特養とすることで、透析治療へ

の移動はエレベーターのみで可能となった。

#### 【まとめ】

高齢者にとって、人生の最後に維持透析導入となることは計り知れない喪失であり、加えて在宅生活が失われるかも知れない不安は非常に強いと想像される。よって、通院支援を通じて透析患者の心と身体を支えるに当たっては、通院システム構築と同時に、院内外にかかわらず関連スタッフに対し、患者の喪失についての配慮を強く説明し、方向性の統一を図る事が大切と考える。